婦人の目

韓国を訪問して

藤屋紀子

ちょうど教科書問題で騒がれていた時期、8月下旬、韓国を訪れる機会に恵まれた。実際に韓国の地を踏んでみて、私たちはこの隣りの国について何も知らなかったというのが実感である。知ろうとしなかったという方が正しいかもしれない。

ソウルを案内して下さった修道女は、「私の兄は日本語が上手に話せるし、理解できるけど絶対に使いません」と語った。

私たち一行七人は韓国語の話せる者は一人もいなかった。

ソウルの郊外にある殉教者の記念の教会を訪れるよう紹介された。タクシーで行くことになり、乗って話しはじめた途端に、日本人だとわかり、「降りて下さい」と言われた。

もう一台の運転手は乗車拒否をした運転手と何か言い合い、そのあともう一台のタクシーをつかまえ、私たちを目的地へつれて行って下さった。どちらも日本語も英語も話せない若い運転手であった。

訪れたその殉教者記念館では、日本語の達者な司祭と大学教授に出会い、韓国の信仰の歴史を詳しく聞くことができた。そして、日本二十六聖人の中に三人の韓国人がいることを聞かされ、これも初耳であった。

釜山は福岡と飛行機で、四十分しかかからない距離にある。そこでは思いがけず、信者さんの家庭に民宿することができた。慶州出身のよい家柄だとかで、そこの家の長男は、私と主人にていねいに韓国式のおじぎをし、もてなして下さった。

日本語のできる従兄がいて、彼は解放の時、国民学校の三年生だったこと。自分たちを教えた先生は小林といい、新婚だったこと。よく先生の家に遊びに行き、奥さんから親切にしてもらったことなど、なつかしそうに話してくれた。そして、「今このような状態にあるけど、私は今でも日本にあこがれと尊敬をもっています。きっと国民学校のよい思い出があるからです」と語った。

突然の訪問で、何のおみやげも用意していなかったので日本に帰ったら何か贈りたいとの申し出に彼は、「ひばりのマドロスさん」のレコードがほしいと言った。

今、私たちはそのレコードを探している。

（主婦）